支部便り

平成20年3月　みつわ会東北支部

群雀葉の芽うながす雨もよい　爽風

雪が雨に変わる「雨水（うすい）」が過ぎる頃から日差しが春めいてきて、夏には、炎天を避けて日陰で信号を待った同じ交叉点で、このところは心地よい日向を選んでいます。まあ、猫みたいなものですね。

万物すべからく太陽の法則に従います。

例会が隔月になって、チョット淋しくなりましたが、3月の例会では元気なお顔を見せて下さい。

――3月の行事――

支　部

▽3月12日（水）※幹事会3時～　二水会5時位～

▽3月27日（木）昼食会「しゃぶ禅」12時～

会費2千円

みちのく損保

▽3月24日（月）幹事会

※議題：新年度の役員は?

：会社100周年とみつわ会50周年行事への関わり方

：20年度総会のこと

：会計関係

などのほか、合議致したき事柄もいささかござりますれば、幹事方々には万障お繰り合わせの上ご出席頂き度願い上げ候。

「ある日の営業所長」

川口　直樹

一昔前の営業所長は偉かった。その気になれば何でも出来た。所長の個性を反映して様々な営業所があった。或る所長の或る日を覗いてみよう。

所長は午前中金融機関廻りに出かけた。表敬をしたり、友好の言葉を連ねたりしながら、油断なく相手の洩らす情報を収集し、新規契約に繋がるものを素早く記憶にインプットした。

早速部下に指示し工作しよう、この辺が切り上げ時と、街の中心にあるビルの6階の営業所に戻った。営業所のドアを開けた途端、所長はあっけにとられた。自分のいない間に机の配置換えがされ、自分の席さえ動かされているではないか。あまつさえ、営業社員はおろか女性社員も出払っており、アルバイトの様な見知らぬ女性が留守番をしている。思わずカッとなって所長は声を荒げた。「俺のいない間に勝手なことをしたのは誰だ!」

留守番は途方に暮れた様子で目を伏せ、それからオズオズと顔を上げると、「あの～何方様でしょうか」と聞いてきた。何たること!所長を知らないとは。そう思って所内を見渡した所長はある疑念が胸を過った。俺の不在の二時間の間に、ここまで大きなレイアウトの変更が出来るのか、まして誰も居ないなんてどういうことなのか。ハッと思った所長は夢中で営業所を飛び出した。

案の定、フロアを間違えて五階で降りてしまったのだ。何食わぬ顔で六階の営業所に戻った所長を、何事もなく女性社員は、お帰りなさいと迎えた。しかし、ビル内の独自の連絡網を通じて、各社の女性社員の間では、たいした評判になったそうだ。

随想「一合の酒」　千葉繁明

お酒を嗜まない方には申し訳ありません。

自慢ではないが、この年になる迄よく酒を飲み続けてきたものである。そんな私の酒人生の話をさせて下さい。

昭和三十六年六月、右手にボストンバック、左手にテニスのラケットを持ち、盛岡の駅頭に降り立った若者がいる。私である。ホームに降り立ったのは、私を含め数人だけ、しかも駅舎は未だ木造で、駅前には人影も少なく寒々としていた。出迎えてくれた人が、あれが岩手山だよと指差すほうに、生まれてはじめてみる岩手山が青空にくっきりと聳え立っていた。其の神々しさに思わず目を見張った。こんな美しい山が真近かに見える盛岡はどんな街なんだろう。道すがら目を凝らすが、ビルらしきものはひとつも見えない。人が住んでいるのだろうか、なんと静かで落ち着いた街なんだろう。まるで童話の世界に降り立ったような思いであった。

こうして盛岡での第一歩を踏み出した私の学生時代は、学校ではテニスに明け暮れ、夜な夜な、銀座界隈をうろつきまわっていたのである。住んでいたのが赤坂で、銀座に近かったせいもあるが、ネオン輝く銀座の街は美しく魅力的であった。「有楽町で会いましょう」「銀座の恋の物語」等素敵な歌が流れ、ウエスタンロカビリー全盛時代の良き時代であったのである。

銀座界隈をうろつきまわっていたにもかかわらず、卒業出来、就職難の時代に損害保険会社に就職出来たのである。しかし、憧れの丸の内のサラリーマン生活とは程遠く、なぜにか、この侘びしい盛岡の街で、社会人の第一歩を、そして私の酒人生の始まりとなったのである。五十年も経った今になって、蘇って来るのは、当時の楽しく切ない想いばかりである。

盛岡に降りてその日に食べた「むら八」のトンカツの味は今でも忘れることが出来ない。学生時代は、カツ丼しか食べたことが無かった私に、あの皿からはみ出るほど大きく、そして柔らかなあの味は、今でも忘れることが出来ないのである。

ある日の事、所長から「ところで君は酒は飲めるのかね」と聞かれ、生意気にもいくらでも飲めますと答えてしまった。学生時代酒なんか飲む余裕なんか無かったくせにである。それでは今日は酒の飲み方を教育してやろうと。事務所の近くにある「みやちゃん」というおばさんがやっている屋台に連れて行かれた。一本、二本と屋台の棚にずらりと徳利が並んだのは、かすかに覚えている。それからは全く覚えていない。近くの交番に飛び込んで暴れ周り、下宿に担ぎ込んで、布団に寝かせようとしても、部屋中を逃げ回って、おばさんを困らせたりしたのだそうである。「下宿のおばさんゴメンナサイ」娘さん三人とおばさんだけの女所帯に用心棒代わりにと下宿した私であるが、とんだ用心棒が来たものである。

この様にして私の酒人生は、さまざまな思い出と共に第一歩を踏み出していったのである。楽しい思い出がある。皆で平庭高原に行き、白樺林に囲まれた芝生の中で酒を酌み交わし、全員で輪になって、八戸小唄を歌い踊ったことを昨日のように覚えている。盛岡の生活は三年間であったが、私に酒を飲む楽しさを教えてくれた懐かしい街であった。

話は飛ぶが、初めての海外旅行で、当時就航したばかりの、日本航空のジャンボ機でアメリカに飛んだ。ディナーの時間となり、お飲み物は何に致しましょうと聞かれたのでためらわず日本酒をお燗してお願いします。かしこまりましたと。流石、日本航空のスチュワーデスである。にこにこしてお燗をした酒を持ってきてくれた。太平洋を飛ぶ機上で飲む酒はすこぶる美味しい。とても気分が好く、チャイムを押しては追加をお願いした。今度は少々熱燗にして下さい。かしこまりましたニコニコして直ぐ持ってきてくれるのである。其のうちに、だんだん顔つきが険しくなってきた。今はスチュワーデスとは言わず、ルームアテンダントというそうで、言うことを聞かない客は直ちに飛行機から引きずり下ろされる時代である。さしずめ、私なんかは落下傘もつけずに太平洋に放り投げられても仕方が無い行為であったと、深く反省している。今から思うと誠に恥ずかしい限りであった。それから三年後に再びアメリカに行った時は、流石に、お飲み物はシャンパンとワインで国際線にふさわしい乗客に成長したのである。

サラリーマン生活も大分年季が入った頃に、九州宮崎に転勤となった。宮崎の街で連れて行かれた店で、ずらっと並んでいる焼酎の一升瓶のボトルキープには度肝を抜かれた。焼酎を生まれて初めて飲んだのである。宮崎では酒といえば焼酎しか出てこないのであるからいやおう無しに焼酎のお湯割を飲み続け、好みの焼酎の味がわかるようになった頃に、今度は秋田に転勤となった。日本酒の王国秋田であるからには、酒はやっぱり日本酒と、日本海で採れた旬の魚を肴に随分と日本酒を飲んだ。それから間もなく本社勤務となり、やっと念願の東京勤務となったのである。

本社では、月の半分は出張していたので、日本中をくまなく歩き回ることになった。行く先々で、その土地の郷土料理と地酒を味わい、訪れた土地は百箇所以上になる。酒好きな私には実にいい思いをしたわけである。

忘れられない同級生がいる。仙台の寺の住職である彼から、ある日、飲みに行こうと誘われた。早速二人で飲みに行った店は、仙台の国分町ではなく、京都の先斗町にある小料理屋であった。流石に仏様の世界、いい店を知っていたのである。加茂の河原のせせらぎを聞きながら京料理で飲む酒の味は又格別であった。その後何度か京都に行く機会があり、その店に寄って飲んで来たがここ暫くは行っていない。又行きたいものである。この同級生は、同級会の度に、引導は俺がちゃんと渡してやるから安心して成仏しろといいながら、さっさとあの世に逝

ってしまった。余生幾ばくも無く残された我々は右往左往しているのである。

　さて、本題の一合の酒の話をしよう。古希を迎えて、老体を修復する為に暫く入院をした。退院の際に、医師から退院後の生活指導を書いた書面を貰った。その書面の余白に、お酒は一日一合にしましょうと、こっそり付け加えて妻に渡したのである。それからは、病院の指導であるからと、毎日一合の酒が出てくるのである。いまさら、あれは自分が書いたとは言えず、仕方が無いから毎日せっせと、一合のお酒を飲んでいるのである。かつて、「一合会」と称して、一時間に一合の酒を飲む会を、住職や医者の仲間達と楽しんでいた事がある。医者と坊主の辻説法である。医師の話では、一合の酒を飲むことは、良薬であり、医学的にも健康の源であるという話である。私は毎日一合の酒を飲むことは理にかなっていると信じているのである。今の私は、毎日の自由な時間を、スポーツジムで汗を流して感性を磨きながら、絵を描き、エッセイ、短歌を創ったりして過ごしている。一日の終わりには、妻の作った旬の一品を肴に一合の酒を飲み、静に余生を楽しんでいるのである。

　処で、私には、趣味、好みを通じて皆で集まっては語り合う事を楽しみにしている素敵な仲間達がいる。この時は、一合に拘らず、好きなだけ飲み大いに語り合うことにしている。普段一合の酒で程良く肝臓をいたわっているのは、此の日の為に備えているからなのである。

（平成20年2月）

青葉通りではケヤキの撤去と移植が始まりました。工事が終わって、跡地に植えた苗木が、５０～６０年後にどんな風に通りを覆っているのか、今はまだ小さい孫達が大人になった時、地下鉄の功罪と併せて見定めてもらいましょう。

青葉通りの撤去作業

西公園に移植された1本目

2本目